富士見市南通第３地点出土の弥生土器について

ーオオバコ回転文の一事例ー

松戸市教育委員会　峰村　篤

ここに紹介する資料は、富士見市南通遺跡第３地点 255 住居跡から出土した弥生時代後期の土器である。この資料は既に富士見市遺跡調査会により報告書が刊行されているが（1)、最近筆者は、水子貝塚資料館で当該資料を見学する機会があり、施文されている回転圧痕がオオバコの花茎を原体とする、いわゆるオオバコ回転文であることを知った。これについては、学芸員の早坂広人氏も既に実験などを進めていた経緯もあり、今回、氏の勧めによりこの土器について紹介を行うことにした。

資料は弥生時代後期中葉に位置付けられると考えられる壷形土器である。下に報告書より転載した実測図と、資料館の許可を得て採拓したものを掲載する。口縁部はいわゆる複合口縁を有し、横のキザミが施された棒状浮文が二本一対で付されている。胴下半部に最大径を持つ。オオバコ回転文は、口縁部、及び頸部・胴上半部に施文される。口縁部では深く密接して施文されるが、頸部・胴上半部では回転の単位が分かるような空白部を部分的に残しながら結節区画間のスペースを埋めるように、やや疎らに施文されている。口縁部は、屈曲する端面と複合面に密接して二段施され、オオバコ回転文施文後に棒状浮文が付けられる。頸部・胴上半部は二列一組となった結節縄文で上下を区画している。結節縄文は一段 R を撚戻しながら一重結びしていると考えられ、圧痕は Z 字状を呈する。

弥生時代後期に属するオオバコ回転文については、以前千葉県の事例について紹介したことがあるが、本例のように壷形土器の結節区画と併用施文される例は初見である。前稿では、同原体がいわゆる「北関東系」の型式群には稀で、県南西部に集中する状況が推察された（2)。その後も幾つか管見に触れているが、同原体の研究者への周知により今後各地域で報告例が増加する事によって改めて本資料の有する意義も判然としてくるであろう。

この資料紹介に当たり、小出輝雄氏には土器の位置付けなどについて懇切なご教示を得た。記して感謝の意を表したい。　　（2009 年 2 月受領）

【註】

1）　小出輝雄　1983　「針ヶ谷遺跡群　-南通遺跡第 3 地点の調査-」　富士見市遺跡調査会調査報告第 21 集　185 図（181 頁）４の土器。

2）　峰村篤　2007「偽縄文を施文する弥生時代後期の土器」　やちくりけん創刊号

峰村篤　2007　「偽縄文を施文する弥生時代後期の土器について（その２）」　利根川 29

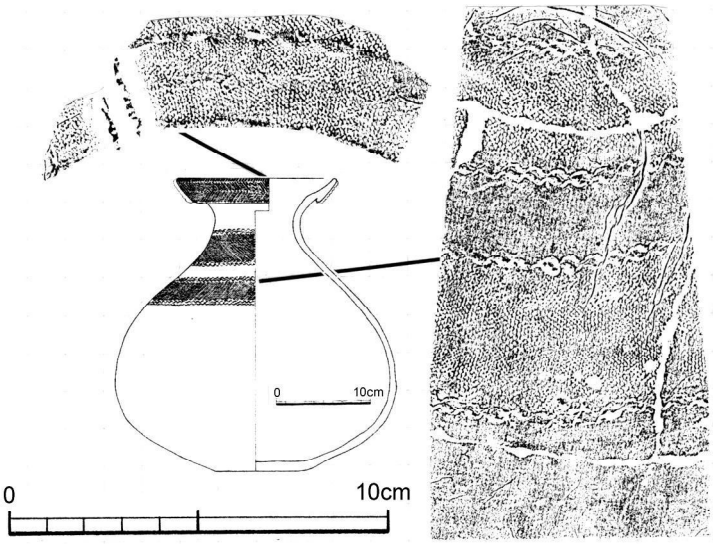

図１　南通遺跡のオオバコ回転文施文土器(S=1/8, 拓影 1/2)

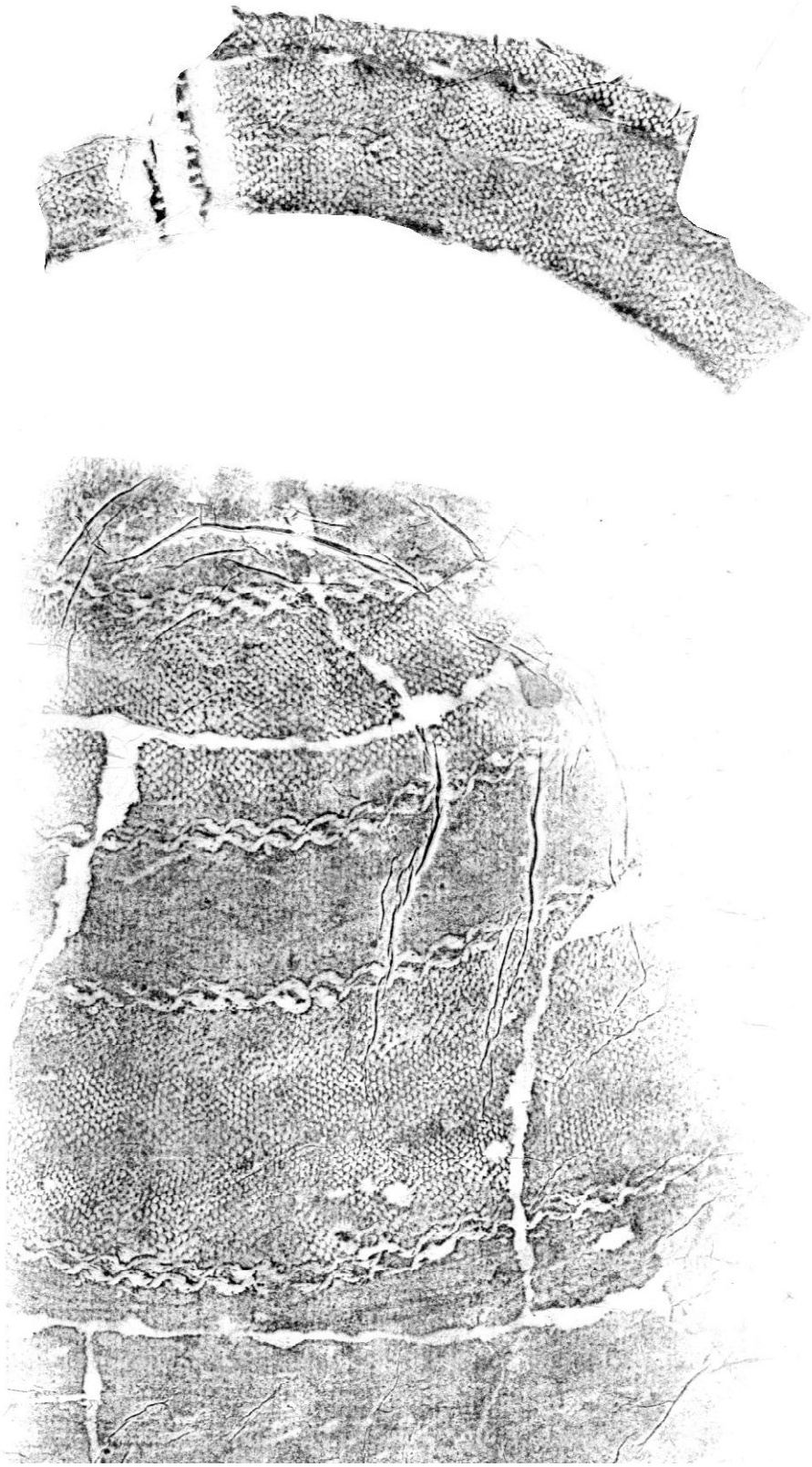

図2　オオバコ回転文の拓影（原寸大）